

## 令和3年度修了生 修士論文概要

**論文題目：**親の「褒め」・「叱り」・「見守り」が子どもの内的作業モデル及び自尊感情に与える影響について

**氏名：**吉田 美波

### 概要

研究1の目的は、子どもの発達に良い影響を与えるであろう「褒め」・「叱り」・「見守り」のバランスについて検討すること、研究2の目的は、「褒め」・「叱り」・「見守り」といった親の養育態度が個人の内的作業モデルを媒介し、自尊感情にどのような影響を及ぼすのかについて検討することであった。大学生266名（1年生97名、2年生110名、3年生47名、4年生12名）を対象に、①親の養育態度、②内的作業モデル測定のための「一般他者を想定した愛着スタイル尺度」（中尾ら、2004）、③自尊感情尺度（山本ら、1982）から構成される質問紙調査をGoogleフォームにて実施した。

研究1では、自尊感情得点が最も高かった親の養育態度は、「見守り」>「褒め」>「叱り」であった。そして、最も自尊感情得点が低かった親の養育態度は、「叱り」>「褒め」>「見守り」であった。続いて、6パターンの親の養育態度間に愛着スタイルの「親密性の回避」および「見捨てられ不安」、そして「自尊感情」に差が見られるかどうかを調べるため、一元配置分散分析を行った。その結果、「親密性の回避」のみに有意差が見られ、「叱り」>「見守り」>「褒め」の方が、「見守り」>「褒め」>「叱り」と比べて親密性の回避得点が高かった。

研究2では、共分散構造分析による内的作業モデルの媒介効果についての検討を行った。その結果、「親密性の回避」の媒介効果のみが認められ、親の養育態度得点が低いほど、「親密性の回避」得点が高く、「自尊感情」得点も低い傾向が見られた。

**論文題目：**青年期女子の友人関係におけるキャラの変遷

— 中学時代と大学時代の比較を通して —

Change and “chara” (character) in relationships to friends among adolescent women

**氏名：**宗村 麻未

### 概要

本研究では、女子大学生を対象とし、中学時代から大学時代の友人関係におけるキャラの変遷について質問紙調査（研究Ⅰ）とインタビュー調査（研究Ⅱ）の両面から検討する。研究Ⅰでは、女子大学生105名にネットアンケートを実施した。その結果、中学時代よりも大学時代のほうが、「キャラがない」者が多かった。友人関係スタイルに分類した

結果、中学では密着群、大学では表面群が多かった。一元配置分散分析の結果から、中学時代では尊重群が自分のキャラが好ましいと考えていた。大学時代では密着群がキャラは一般的にメリットがあると考えていた。重回帰分析の結果から、心理的距離が近いほど自分のキャラが好ましく、同調性が高いほど、「一般的にキャラはメリットがある」と認知していることが示されていた。研究Ⅱでは、中学時代と大学時代においてキャラに変化が見られた女子大学生5名にインタビュー調査を行い、M-GTAを用いて分析した結果、大学になると多くの者においてキャラの上手な付き合い方が分かり、ありのままの自分を受容するように変化していた。つまり中学時代よりもキャラを介した友人関係は少なくなり、自分自身に目がいく傾向が見られた。研究ⅠとⅡの結果から、キャラにおける変化の過程では、青年期の発達課題であるアイデンティティの確立の過程とも捉えられる。キャラは青年期の心理的発達において、良い影響・悪い影響の両面があることに注意を払うべきであろう。

**論文題目：**ソーシャルサポートが大学生の居場所感および抑うつ・攻撃性に及ぼす影響  
—サポート源・ソーシャルサポート内容の視点から—

**氏名：**宿利 遥香  
**概要**

本研究では、ソーシャルサポートが大学生の居場所感および抑うつ・攻撃性に対してどのような影響を及ぼすのかについて、サポート源・ソーシャルサポート内容の視点から検討することを目的とした。オンライン調査ツールであるGoogleフォームを用いて、青年期にあたる女子大学生1～4年生182名を対象にアンケート調査を行った。

使用した尺度は、居場所感尺度、大学生用ソーシャルサポート尺度、日本版Buss-Perry攻撃性質問紙、日本語版CES-D Scaleであった。

これらの尺度間の相関分析およびAmos28を用いたパス解析を行った結果、ソーシャルサポートと居場所感には関連があることが示された。他者から援助的行動をもらえる関係性において居場所であると感じやすく、対人関係の中で自分が役に立っている、ありのままにいられると思えることが他者からの支持的な関わりを知覚しやすくさせることが考えられる。また、対人関係においてソーシャルサポートという支持的な関わりをもった関係性が居場所感へとつながり、結果として攻撃性の一部の下位尺度および抑うつに影響を及ぼすといった過程が確認された。居場所感に対する影響をソーシャルサポート内容の視点から検証したことにより、居場所感の向上および居場所であると感じられるために期待される支持的な行動が明らかとなった。特に、「評価的サポート」が居場所感に大きく影響していることが示された。これらのことから、少なくとも居場所感の向上の一つに支持的な関わりが必要であることが示唆され、個人の心理的な健康状態を予測するためにも、居場所感を高める関係の在り方、そして、役に立っている、ありのままにいられると感じら

れることが重要であることが考えられた。

**論文題目：**Sexual Orientation and Gender Identity (SOGI) ハラスメント認識・体験尺度  
の作成

**氏 名：**小川 萌

**概 要**

性の多様性が認識される中で、Sexual Orientation and Gender Identity (SOGI) に基づくハラスメント防止への対応が求められる。しかしまだ個人や集団におけるSOGIハラスメントに関する認識を評価する尺度も、SOGIハラスメントの実態を評価する尺度も存在していない。そこで本研究では、SOGIハラスメントの認識・体験尺度を作成し、因子構造、内的整合性、構成概念妥当性を検討した。

まず、研究1で、性的マイノリティ当事者5名へのフォーカスグループインタビュー調査を行い、その逐語録をKJ法に倣った方法で分析した。その結果、SOGIハラスメントにあたる言動として、<SOGIに関する偏見に基づいた言動><アウティング><ジェンダーに基づく振る舞いを求める><異性愛を前提とした言動><性別を確認する言動>の5つのカテゴリーと17の小カテゴリーが抽出された。次に研究2で、研究1および先行研究のレビューをもとに24項目からなる「SOGIハラスメントの認識尺度」、「SOGIハラスメントの体験尺度」を作成し、大学生および大学院生290人に対する質問紙調査を実施した。探索的因子分析の結果、「SOGIに基づく嫌がらせ」、「性役割に沿った振る舞いの要求」、「無理解に基づいた偏見」、「異性愛を前提とした言動」の4因子構造を持つ23項目の尺度であることが示唆された。尺度全体および下位尺度の内的整合性は十分であった。尺度の合計得点は性的マイノリティが性的マジョリティより有意に高く、先行研究と一致していることから、「SOGIハラスメントの認識尺度」、「SOGIハラスメントの体験尺度」は一定の構成概念妥当性を有すると考えられた。

**論文題目：**友人関係におけるキャラの使用と演技、自己受容・他者受容、QOLの関連について

**氏 名：**神田 麻衣

**概 要**

2000年代後半ごろから青年の友人関係にはキャラを用いたコミュニケーションが多用されている。そこで本研究では、友人関係におけるキャラの受動的使用・能動的使用と、演技行動、自己受容・他者受容、QOLとの関連を明らかにすることを目的とし、同意の得られた関東圏内の4年生大学の大学生及び大学院生333名を対象とし、質問紙調査を行った。

クラスタ分析の結果、キャラの使用の仕方は適応的使用群、配慮的使用群、不使用群、主張的使用群の4つの群に分かれた。分散分析の結果、配慮的使用群に比べ主張的使用群は演技が行われておらず、キャラを能動的に使用している方が自己・他者受容が高く、QOLも高いという結果が得られた。配慮的使用群よりも主張的使用群の方が日常で演技をしておらず、自己受容・他者受容を行えており、QOLも高いことから適応的に過ごしていると考えられる。しかし、友人関係では場に応じてキャラを変えることで関係性を保つと考えられるため、周囲との関係を考慮した際には能動的に使用していることが適応的であるわけではないと思われる。そのため、この点について今後検討していくことが必要であると考えられる。また、適応的使用群は自己・他者受容、QOLが平均程度という結果となり、不使用群は自己受容及び自尊感情が低い結果となった。適応的使用群は周囲に気を遣うため、自己・他者受容やQOLが平均程度となったのではないかと考えられ、不使用群は現状に満足しつつも、どこか不全感を抱いている可能性が推測される。

#### 論文題目：学校でのトラブル場面における第三者的立場の子どもたちによる教師への援助要請

氏名：菅 佳菜美

#### 概要

本研究では、日常のトラブル場面における第三者的立場の子どもたちの教師への援助要請に関する行動実行の利益とコストの予期に影響を及ぼす要因について、学級風土に着目し、小学生を対象に質問紙調査を行った。大きくは以下の2つの示唆が得られた。(1) 学級風土の全体的な良好さが、教師への援助要請に関する行動の実行の利益とコストの予期にポジティブな影響を及ぼす可能性が示唆された。(2) 学級風土の各因子が与える影響では、次のような可能性が示唆された。①全体的・②5年生：「規律正しさ」が教師への援助要請利益の予期促進の可能性と、教師のネガティブな反応への予期を抑制することに繋がる可能性。「自然な自己開示」が自助努力への予期抑制につながる可能性。③6年生：「規律正しさ」が教師への援助要請利益の予期促進の可能性、教師のネガティブな反応への予期抑制の可能性。④男性：「自然な自己開示」が援助要請をして問題が解決されることへの予期促進の可能性、秘密が守られないことへの予期抑制の可能性、自分で解決しようとすることの予期抑制の可能性。また、「規律正しさ」が教師のネガティブな反応への予期抑制につながる可能性。⑤女性においては「学習への志向性」が教師への援助要請の利益促進に、「学級への満足度」がネガティブな反応の予期抑制や秘密が守られないことへの予期抑制につながる可能性。学級風土にアプローチしていくことで、子どもたちの援助要請を促すことに繋がるのが考えられるではなかろうか。

**論文題目：**『出生順位がコミュニケーション・スキルに及ぼす影響  
—きょうだい間の人間関係に着目して—』

**氏名：**星野 歩惟

**概要**

本研究では、出生順位が現在のコミュニケーション・スキルに及ぼす影響を、きょうだい間の人間関係に着目して検討するために、「2人きょうだい、3人きょうだいを対象に、出生順位が現在のコミュニケーション・スキルに及ぼす影響を検討する」、「2人きょうだいと3人きょうだいの出生順位における、コミュニケーション・スキルをそれぞれ比較した上で、出生順位がコミュニケーション・スキルに及ぼす影響の要因が、きょうだい間のどのような人間関係にあるかを検討する」といった2点を目的とし、アンケート調査とインタビュー調査を行った。ENDCOREs尺度を用いたアンケート調査の結果、「表現力」において、長子よりも末子の得点が、有意に高い傾向がみられ、「関係調整」において、一人っ子よりも長子の得点が、有意に高い傾向がみられた。これらの結果から、「表現力」、「関係調整」共に得点が高かった末子と、「表現力」の得点は低く、「関係調整」の得点が高かった長子に対し、半構造化面接によるインタビュー調査を実施した。その結果、きょうだい関係において、末子は長子からの〔ネガティブな関わり〕や“発散”を繰り返し受けることで、様々な葛藤を抱え、学習しながら対処してきたことによって、適応的な対処行動を習得していたこと、また、長子は、“きょうだいに対するポジティブな関心”を抱き、〔ポジティブな関わり〕をしていたことや、〔末子の対処行動〕を受け、“相手に合わせる”といった〔長子の修復〕を行っていたことなどが明らかとなった。このようなきょうだい間の人間関係が、現在のコミュニケーション・スキルに影響を及ぼすことが示唆された。

**論文題目：**アセスメント・クエスチョンの設定がフィードバック面接に与える影響

**氏名：**町井 美緒

**概要**

治療的アセスメントとはFinn & Tonsager (1997) によって提唱された心理検査とそのフィードバックに関するアプローチである。治療的アセスメントはクライアントとの共感的なつながりを進展させること、アセスメント目標を明確にするためにクライアントと協同的に話し合うこと、全体のアセスメントを通してクライアントと情報を共有し探求することを目的とする。治療的アセスメントは本邦においても注目を集めているが、日常臨床における時間・構造的制約を考慮すると、技法の部分的な利用を検討する必要性が指摘されている。そこで本研究は治療的アセスメントの6ステップのうちアセスメント・クエスチョン (Assessment Question: 以下, AQと略記) の設定を部分的に取り出し, AQ設定がフィードバック面接の評価および面接自体に及ぼす影響について量的, 質的, 両側面から

の検討を行った。

対象者は大学生および大学院生19名であった。対象者をAQ設定群と非設定群に無作為に割付け、事前の面接・心理検査・フィードバックからなる介入を行った。フィードバック終了後に自記式質問紙（セッション評価尺度、アセスメント質問表、自由記述）を配布して心理アセスメントとフィードバック面接への評価を求めた。さらに対象者の同意を得たうえでフィードバック面接を録音し、逐語記録を作成した。

セッション評価尺度とアセスメント質問表の下位尺度得点について対応のない検定を行ったところ、2群間に有意差はなかった。質問紙の自由記述およびフィードバック面接逐語録の質的分析では、AQ設定群は正直に自己開示できたという記述が多く、フィードバック面接において検査者と受検者で協同的に話し合いながら修正を重ねていくプロセスが観察された。その一方で、非設定群は検査・面接に対して、より気楽に取り組めたことが示唆された。

これらの結果から、AQの設定はフィードバック面接における検査者と受検者の協同的な話し合いを促進する可能性があること、その一方で、AQの設定によって、より受検者自身に焦点が当てられることにより、心理検査受検への「気楽さ」が失われる可能性が示唆された。本研究の結果は治療的アセスメントにおいてAQを設定することの治療的機能を説明している可能性がある。しかし受検者によっては、自身に焦点づける準備が整っていない場合もあることをふまえ、慎重に導入することが必要だと考えられた。

**論文題目：**テレワークにおける雑談のパフォーマンスへの効果検討

**氏名：**武居 香里

**概要**

本研究では、テレワークの課題遂行における雑談が個人や集団のパフォーマンスに与える影響を明らかにすることを目的とした。対象者は私立X女子大学学部3年生（実験群5名（ $M=20.20$ 歳， $SD=.447$ ），統制群4名（ $M=21.00$ 歳， $SD=.000$ ）），学部4年生（実験群7名（ $M=21.14$ 歳， $SD=.378$ ），統制群3名（ $M=21.33$ 歳， $SD=.577$ ））であった。実験はWEB会議システムZoomにて、実験群（①pre質問紙，②雑談（20分間），③単純計算課題：百マス計算（7分），④グループディスカッション（20分間），⑤post質問紙），統制群（実験群手続きから②を除いたもの）を実施した。pre・post質問紙はSD法で構成されたポジティブ感情尺度（伊藤・宮崎，2012），下位尺度は「快適さ」，「健全な闘争」，「共感」，「素朴な安らぎ」の4つであり，7段階評定である。グループディスカッション評価は創造的意味尺度（吉田・服部，2006）を用いた。

結果は，3年生の実験群は実験後に思いやりのある，感じの良い方に高くなることが明らかとなった。よって4年生と比較し，密接な関係性がない集団に雑談の効果がみられた。さらに4年生において実験群は統制群より創造的意味評定得点が有意に高いことが明

らかになった。よって密接な関係性がある集団においては意見がクリエイティブさの高い意見が生まれるという雑談の効果が見られた。本研究から雑談は集団の関係性に応じた効果を持つことが示唆された。

**論文題目：**効果的なLINEカウンセリングの質的検討 ―計量テキスト分析を用いて―

**氏名：**平木 蒼佳

**概要**

実際に展開されたLINEカウンセリングのデータを用いて、効果的なLINEカウンセリングの特徴について検討することを本研究の目的とした。

研究対象は、5回以上継続されたLINEカウンセリングのカウンセラー側のテキストデータとした。分析方法は、計量テキスト分析（KH Coder）を用いた。

該当したデータのCIのテキストメッセージを3名で評定し、評定得点を平均したものをCI満足度得点とした。概ね上位、下位25%のデータを選出し、上位15件をCI満足度高群、下位17件をCI満足度低群とした。

CI満足度高群と低群それぞれのCoのテキストメッセージを「KH Coder」にかけた結果、最終的に7種のアプローチに分類できた。7種のアプローチは、①一般的な見解、②CIのメッセージに対する明確化、受容共感、③CoのCIのメッセージに対する感情・考えについて、④アドバイス、⑤定型文、⑥CIをアセスメントするための質問、⑦その他である。7種のアプローチの用いられ方より、LINEカウンセリングにおいて、CIのメッセージに対する明確化、受容共感CIの満足感を高める可能性があることが示唆された。

また、カウンセリング的関わりとコンサルテーション的関わりという2つの観点で4件法評定を行い、この2つの変数を独立変数、CI満足度を従属変数に重回帰分析を行った。その結果、コンサルテーション的関わりがCI満足度に負の影響を及ぼしていることが明らかとなった。LINEカウンセリングの場合も、コンサルテーション的関わりには留意する必要があると考察した。